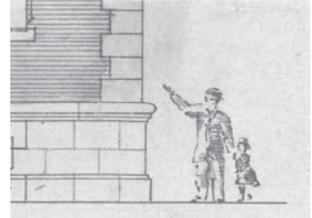


— 連載 —

美術館のある風景 (第21回)



三菱一号館立面図（コンドル）の一部を拡大

美術館と社会

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二

最近、美術界で「美術館と社会」が話題になります。また、美術の活動は、医療や福祉、コミュニティ再生、町おこし、環境啓発等の分野へと広がりを見せています。美術と社会の関係も再考の時期なのでしょう。三菱一号館（以下、当館）と社会を考える上では、その誕生の歴史にヒントを見出せます。最初の種はこの街の始動期（1890年代初頭）、丸の内は「皇居の正面に洋風市街地を現出せしめて、帝都の美観と新興日本の文明を内外に知らしめる」（岩崎彌太郎伝）街づくりを志向し、三菱の重鎮・荘田平五郎は、「ミュージアムのようなものをつくりたいので、コンドルと相談してほしい」と技師長の曾禰達蔵宛の書状を記しました。街づくりを主導したジョサイア・コンドル（1852～1920年）は美術館の計画図を描きましたが、その実現は夢に終わりました。

やがて、100年が経過、丸の内ビジネスセンターは地球規模の視点に立つ新たなビジネス街への脱皮を図る時代を迎えました。丸ビル建替え（2002年竣工）に始まる現在の丸の内再構築です。この動きは、「Open・Interactive・Network」を掲げ、「街を開き、様々な交流から生まれる人と企業のネットワークが丸の内の財産」との認識に基づき進められています。このビジョンの先に育まれる地域ブランドの中に美術館誕生の素地が見える気がします。丸の内は、知的生産性が求められるビジネスの現場です。その源泉は多様な企業や人材の集積と交流です。そこに知識と感性に支えられ

た創造性が介在します。美術館は教養享受の場に止まらず、多様な価値観に触れて柔軟な精神を回復する場、近い人との交流の場でもあります。120年前の美術館構想は欧米に範を置く街の姿から求められました。美術館づくりの遺伝子は街の活動の集積という土壌の形成を待って、次の時代への期待を担う当館へと結実したのかもしれない。街と共に生きる美術館としての成長を期待したいものです。

昨年逝かれた宇沢弘文氏は、豊かな経済生活を営み、人間的に魅力ある社会を安定的に維持する装置としての「社会的共通資本」を提唱されました。都市はその重要な対象の一つです。また、アメリカの都市計画家ジェーン・ジェイコブスは、人間の密度と親密さが生み出す多様性こそ都市の財産であると指摘しています。そして、美術館は多様性への寛容さが問われるとも言われます。社会・街との双方向のコミュニケーションが大切なのでしょう。ふと、塚本邦雄の「聖母像ばかりならべてある美術館の出口につづく火薬庫」という句跨ぎの短歌を思い起こします。地球規模の視線が問われます。

当館では、6月27日から「画鬼暁斎-幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」展が始まります。河鍋暁斎は、「暁英」の画号を持つコンドルの日本画の師匠、二人の交流は展覧会の柱の一つです。6月21日はコンドルの命日、妻の「くめ」と一緒に護国寺に眠っています。